雨森芳洲が随行した 朝鮮通信使とは

▲朝鮮通信使絵巻「正徳度朝鮮通信使参着帰路行列図巻」(高麗美術館蔵・一部抜粋)

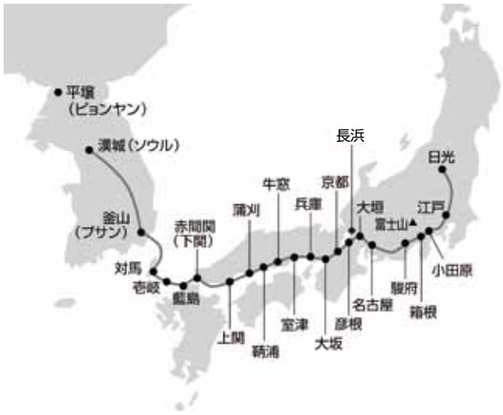
日本国と朝鮮国との国交は、２度にわたる朝鮮出兵「文禄・慶長の役」によって一時は断絶しましたが、江戸時代に入って対馬藩を仲立ちに回復しました。朝鮮国とは、江戸時代の鎖国政策の中にあっても、対等の友好国として正式な国交を結んでいました。そして朝鮮国王より将軍に対して遣わした、「信を通じる」友好のあかしの使節団が朝鮮通信使です。

将軍の代替わりの祝賀などの目的で、慶長12年（１６０７）から文化８年（１８１１）までの約２００年間に12回来日しました。通信使一行は毎回３００～５００人で構成され、釜山から大坂までは海路、そこから江戸までは陸路をとりました。

異国の文化を迎え、それを見物し、彼らと交流することは、わが国にとって江戸時代きっての国際的イベントで、通信使一行は武士階級のみならず、文人や一般民衆からも大歓迎されました。

海外事情に乏しかった当時の日本人にとって、鮮やかで見慣れぬ衣裳・風体、鼓膜と心を刺激する楽器の音色など、異国の文化使節団を目のあたりにすることは、カルチャーショックそのものだったことでしょう。通信使を迎え、彼らと交流した記録は、九州から江戸にかけて、各地に残されています。

朝鮮通信使は、両国の平和的な関係を構築し、維持させることに大きく貢献しました。朝鮮通信使が往来する両国の人々の憎しみや誤解を解き、相互理解を深めたことにより、両国は外交のみならず学術・芸術・産業・文化などのさまざまな分野において、活発に交流することができたのです。その根底には、雨森芳洲が説いた「互いに欺かず、争わず、真実をもって交わることこそ、誠信である」という、誠意と信義を重んじた「誠信交隣」の精神が流れていたのです。



▲朝鮮通信使行程図

この度、「世界の記憶」に登録申請されている資料は、「外交記録」、「旅程の記録」、「文化交流の記録」のジャンルで構成され、芳洲会所蔵の「雨森芳洲関係資料」（雨森芳洲の子孫から芳洲会へ寄贈された資料群）がこれに含まれます。

▲瓦人形（近江八幡市蔵）
当時の鬼瓦作りの職人が製作したもので、宝暦14年（1764）の第11回通信使をモデルとしていると考えられる。

登録に向けての取組

「雨森芳洲関係資料 ユネスコ『世界の記憶』 登録推進実行委員会」の設立

▲設立総会の様子

ユネスコ「世界の記憶」に登録申請された資料１１１件３３３点のうち、１件36点が芳洲会が所蔵（市管理）する「雨森芳洲関係資料」です。早ければ今年秋にも登録されることから、その推進および啓発普及を目的に、芳洲会や地域づくり協議会等が中心となって、実行委員会が結成され、先日、設立総会が開催されました。

「誠信」を受け継ぐ長浜

京都造形芸術大学客員教授
仲尾（なかお）宏（ひろし）氏

雨森芳洲が長年の朝鮮関係の仕事を総括し、藩主への提言としてまとめた書物「交隣提醒」の中で最も強調しているのが「誠信の交わり」の大切さです。

「誠信と申し候は、実意と申す事にて、互いに欺かず、争わず、真実をもって交わり候を、誠信とは申し候」

これこそが彼が後世に残した最大の遺産であり、まさに今日の国際社会がめざす未来の指針です。

長浜の皆さんが郷土の先人の思いを受け継ぎ、伝えていくことは大変意義深く、今後の地域づくりの大きな力となることでしょう。

長浜市の取り組み

合併前の高月町では、芳洲ゆかりの対馬市との姉妹縁組・交流を行い、朝鮮通信使縁地連絡協議会に参加し、平成10年と21年には全国大会を主催するなど、芳洲思想の継承と他自治体・団体等との交流を行ってきました。また、生家跡に建つ「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」では、芳洲の思想と業績や、朝鮮通信使など江戸時代の日朝交流を展示紹介し、町全体として芳洲思想の浸透や韓国との交流事業を、地域づくりの核として活動してきました。

合併後も、「ＮＰＯ法人朝鮮通信使縁地連絡協議会」に参加し、対馬市と共に朝鮮通信使の「世界の記憶」登録を積極的に推進してきました。平成27年秋には、長浜文化芸術会館でシンポジウム「雨森芳洲と朝鮮通信使」や、長浜城歴史博物館と高月観音の里資料館で特別展を開催するなど、ユネスコ登録をさらに後押する事業を展開しています。

①

①富永小学校で毎年行われている芳洲子どもミュージカル
②長浜城歴史博物館での特別展
③関係団体を招いてのシンポジウム

②

③